早稲田大学現代政治経済研究所

ドイツ語学文学の国際交流・国際発信
―日本独文学会の国際交流事業を中心に―

室井 禎之

No. J1303

Working Paper Series

Institute for Research in
Contemporary Political and Economic Affairs

Waseda University
169-8050 Tokyo, Japan

ドイツ語学文学の国際交流・国際発信　―日本独文学会の国際交流事業を中心に―[1]

室井 禎之

1.　はじめに

対外発信がさまざまな分野で、またさまざまなレベルで行われていることは言をまたない。外国語学・文学研究はややもすると、受容的な側面を強くもつ分野と思われがちだが、それが研究である以上、つねに発信をともなうことは当然のことである。もとより学術研究は、先人の業績を受容し、そこになにがしかのものを付け加えて外へ出すことによって成り立っているのであり、発信はその営みの不可欠な一部である。発信をめぐる近年の関心は、対外発信が強調され、日本が世界にという方向性が焦点化されているのが特徴である。これにはおそらく 1990 年代初頭の政治的、経済的状況を背景として、それに対する一つの反応としてその重要性があらためて意識されるようになったという位置づけも可能であろう。

もちろんそのような要請があってから日本のドイツ語学・文学研究が対外発信をはじめたわけではなく、それが学問的要請からすでに行われていたことは言うまでもない。ドイツ語学・文学研究はドイツ語で Germanistik[2]と呼ばれ、それに従事する人を Germanist と称する。（日本でもそれを仮名書きにした「ゲルマニスティク」および「ゲルマニスト」の名称がこの分野の中で通用している。簡潔でもあるので以降主としてこの用語を用いる）これに「外国」を意味する名詞を冠した Auslandsgermanistik という概念がある。ドイツ語圏諸国（ドイツ・オーストリア・ドイツ語圏スイス）[3]以外の地域におけるゲルマニスティク研究のことであるが、異文化にとってのドイツ語・ドイツ文学のもつ意味を考えるだけでなく、ひるがえっては外からの視点、異文化間の視点をもたらし[4]、ゲルマニスティクに発展的な刺激を与え、その広がりに寄与するものとして位置づけることができる。

ゲルマニスティクの最も大きな国際会議は「国際ゲルマニスティク協会」（Internationale Vereinigung für Germanistik, 略称 IVG）の大会であるが、1955 年から 5 年ごとに開催されたこれまでの 12 回の大会のうち、スイス（1980 年）、ドイツ（1985 年）、オーストリア（2000 年）を除いた 9 回はドイツ語圏の外で開催されている。そしてまた大会の総合テーマも初

---

[1] 本稿は 2013 年 7 月 10 日に早稲田大学現代政治経済研究所「日本の対外発信部会（部会主任：砂岡 和子）研究会」にて行った同題の口頭発表に加筆・修正を施したものである。

[2] 日本独文学会のドイツ語名は Japanische Gesellschaft für Germanistik である。なお、Germanistik は広義で英語学・英文学を除いたゲルマン諸語の語学・文学の研究をさすこともある。(cf. Horst Brunner/Rainer Moritz (Hg.): *Literaturwissenschaftliches Lexikon.* 2. Aufl. Berlin (2006): 141)

[3] 厳密に言えばリヒテンシュタインもこれに含まれる。

[4] 文化科学にとっての外からの視点の重要性についてはたとえば Alois Wierlacher: “Deutsch als Fremdsprache –Zum Paradigmawechsel internationaler Germanistik.” In: A. Wierlacher (Hg.): *Fremdsprache Deutsch 1*, München, 1980 に示されている（特に 17 ページ）。

めてヨーロッパアメリカ以外の地域で開かれた 1990 年の東京大会以来、Auslandsgermanistik に関連したものが見られるようになった。[5] この協会では大会時に次期の会長が選出され、5 年後にその勤務地にて次期大会が開催される。1985 年のゲッチンゲン大会で岩崎英二郎慶應義塾大学教授（当時）が会長に選出され、90 年に慶應義塾大学三田キャンパスにて東京大会が開催された。[6]この全世界からゲルマニストたちが集まる会議の開催は日本のゲルマニストたちにとって大きな意味を持ち、その後の国際展開への大きな原動力となった。

本稿では、このような背景のもと現在日本のゲルマニストたちがどのようなかたちで対外発信を行っているか、日本独文学会の国際交流事業を中心に、その試みを報告する。以下ではまず日本独文学会の概要を紹介する。それに続いて学会の主な事業である、研究発表会、機関誌、ゼミナールを国際交流・国際発信の面から紹介し、さらにウェブサイト、東アジア地域のゲルマニスティクの交流等について述べる。また、個人のイニシアチブによって国際交流・国際発信を組織化・継続化しようとする試みにも触れる。

2. 日本独文学会の概要

日本独文学会は「ドイツ語ドイツ文学研究の研究および普及に貢献することを目的とする」（会則第 2 条）学術団体である。日本においてゲルマニスティク研究の団体として最大であり、2013 年の総会資料によると同年 5 月 13 日現在で会員数は 1,847 名、他に賛助会員として 24 団体が参加している。戦後まもない 1947 年に創設されたこの学会は、発足以来会員数を順調に増やし、1996 年には 2,560 名を数えたが、その後は漸減を続けている。[7]

会員の研究分野は多岐にわたり、ドイツ語文学、ドイツ語圏文化研究、ドイツ言語学、ドイツ語教授法が主な領域である。日本の学会は文学と語学がそれぞれ独立しているケースが多いが、独文学会は一つの組織として活動している。ただし数から見ると、文学、ないし文学に基盤をおいた文化研究を専門としている会員が圧倒的に多く、言語学、ドイツ語教授法の研究者はさほど多くない。[8]

独文学会の主要な事業として 3 つの活動をあげることができる。春季･秋季の年 2 回行われる研究発表会、機関誌 “Neue Beiträge zur Germanistik” の発行、そして文化、語学、教授

---

[5] 同協会ウェブサイト参照: http://www.ivg2015-tongji.com/index.php (2014.3.7 参照). Rainer Kußler によれば、すでに 1885 年に当時の会長 Albrecht Schöne がゲッチンゲン大会の開会演説で異文化間アプローチを明確に支持している。 (Rainer Kußler: “Landeskunde in der außereuropäischen Auslandsgermanistik.” In: G. Helbig et.al. (Hg.) *Deutsch als Fremdsprache*. 2. Halbband, Berlin/New York, 2001: 1329) なお、次の大会は 2015 年に上海での開催が予定されている。

[6] この大会については独文学会機関誌に報告が掲載されている：岩崎英二郎「IVG 東京大会報告」日本独文学会編『ドイツ文学』86 号（1990): 176-178.

[7] 日本独文学会編『日本独文学会の 60 年』（郁文堂 2009 年）所収の年譜による。

[8] ドイツ言語学を専攻している研究者の多くが所属している「ドイツ文法研究会」の会員数は機関誌『エネルゲイア』38 号（2013 年 5 月 15 日刊）によると 2013 年 3 月現在 185 名である。

法の 3 つのゼミナールである。

3. 日本独文学会の国際交流・国際発信事業

3.1. 研究発表会

研究発表会はどんな学会でも行っている活動で、学会である以上必須の活動であるが、基本的には、会員の間の研究成果の交換、情報交流という点に主眼が置かれ、国際交流や国際発信という機能はあまり念頭に置かれていないといえる。ただし、研究発表会の際に行われる招待講演には多くドイツ語圏をはじめとする外国のゲルマニストを講師として招いている。

また、日本独文学会は 2002 年から 2005 年まで秋の研究発表会の機会に「国際会議」（ドイツ語では Internationales Kolloquium）と呼ばれる国際研究集会を半日開催していた。そこではドイツ語圏あるいはアジアからもゲストを招き、大きな全体テーマのもと、いくつかのセクションを作り研究発表と討論が行われた。この集会は 3.2 で述べる機関誌の刊行体制の変化とかかわって開催されたものであり、2006 年以降は、ふたたび機関誌の刊行体制に変更があったため、その役割を終え開かれていない。

3.2. 機関誌の国際展開

3.2.1. 機関誌国際誌の刊行

日本独文学会の機関誌は会の設立の年に『獨逸文學』として刊行が開始された。その後「獨逸」が「ドイツ」に、「學」が「学」になるといった表記上の変遷を経ながらも、2002 年の 108 号まで同一のタイトルで出版されていた。当初は年 1 冊発刊されていたが、1950 年からは年 2 冊の刊行となった。使用言語は日本語ないしドイツ語である。それが 2002 年の 109 号から[9]タイトルを上述のように “Neue Beiträge zur Germanistik” とし、そこに『ドイツ文学』としての通算巻号を付記する形となった。このときの変更はただタイトルを変えただけではなく、機関誌を国際誌と国内誌という 2 本立てにしたことに大きな意味がある。すでに 1955 年の 14 号を皮切りに全巻ドイツ語の文章のみで構成されている号もたびたび作られてきたが、この年度から国際誌（Internationale Ausgabe）を定期的に発行することになったのである。出版社はミュンヘンにある Iudicium 社で、定価をつけて一般に販売もされている。[10] 国内誌（Japanische Ausgabe）にもドイツ語による論文等が掲載されるので、機関誌の紙面でドイツ語のテキストが占める割合は大幅に上昇することとなった。なお、国際誌ではドイツ語圏に限らず世界から 8 名程度の著名な研究者に国際顧問を依頼し、助言を求めている。

独文学会はもちろんドイツ語やドイツ語圏の文学、文化現象を研究対象とする研究者の

---

[9] 年度でいうと 2002 年 108 号は 2001 年度、109 号から 2002 年度になる。

[10] Iudicium 社のウェブサイト http://www.iudicium.de/ で確認できる。同社は人文科学、とりわけ日本・東アジア研究とゲルマニスティク関連に重点を置いた出版社である。

団体であるから、その会員はもとよりさまざまな形で研究成果のドイツ語による国際発信は行ってきたし、また行っている。すなわち、ドイツ語で著書を書いてドイツ語圏で出版する、『ドイツ文学』も海外のさまざまな教育研究機関に送られているので、そこにドイツ語で書けば海外の読者の目にも触れる、あるいはドイツの学術雑誌に投稿するなどいくつものやりかたがある。ドイツの出版社から発行し、当地でも販売する国際誌をつくるという機関誌の刊行体制の整備は、そのような活動をさらに積極的に展開する場を会員に提供し、学会が組織として国際発信に取り組むという意味をもっている。

国際誌の刊行に関してはこうした内的な機運と並んで、ある外的な要因がその実現に関して一つの大きなきっかけを与えたことを見逃すことはできない。それは日本学術振興会の研究成果公開促進費の補助方針である。1999 年の学術審議会科学研究費分科会企画・評価部会研究成果公開促進費の在り方に関するワーキンググループの提言「科学研究費補助金研究成果公開促進費の在り方について（報告）」[11]に示された学術誌の国際情報発信強化の方針のもとに、学会等が発行する学術定期刊行物のうち国際性の高いものを重点的に助成することとされた。[12] 日本独文学会はこの方針に沿う形で機関誌の刊行体制を整備し、補助金を獲得していった。[13] 国際誌を導入した 2002 年に続く 2003 年度には国際誌 4 冊、国内誌 1 冊が刊行され、2004 年度はそれぞれ 5 冊と 2 冊、2005 年度は 4 冊と 2 冊、2006 および 2007 年度はそれぞれ 2 冊ずつ刊行された。これだけの冊数が刊行できたのは学術振興会から相当額の補助金を得ていたことによる。しかし、この状況も長くは続かなかった。2005 年度ころから学術振興会の補助の縮小があり、またより深刻な問題として、一定額以上の補助金を受ける場合印刷業者を競争入札により選定することを求められたことが上記のような冊数の確保を難しくした。競争入札を行う場合その参加資格として全省庁統一資格をもつことが条件として課せられたが、外国の決して大きいとは言えない出版社にその資格の取得を求めることは非現実的であるため、競争入札が必要とならない額の範囲内に全体の刊行費用を収める必要が出てきたのである。その他の諸般の事情も勘案し、2008 年度からは国際誌・国内誌を各 1 冊刊行することとなり [14]、現在にいたっている。

量的な点からいえば、2002 年度までの 2 冊体制が、紆余曲折を経て 2008 年度にもとの 2 冊体制に戻ったということになるが、機関誌の役割という点では、国際誌がこの間完全に定着し、日本のゲルマニスティクの研究成果を国際的に発信する媒体として機能している。冊数が増えた時には 3.1 の最後に述べた国際会議の発表をもとにした論文、3.3 で述べるゼ

---

[11] http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/002-1/siryo/attach/1306917.htm (2014.3.7 参照)

[12] 日本学術振興会科学研究費委員会「研究成果公開促進費の在り方について（報告）」(2002 年 7 月 23 日) http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/06_jsps_info/g_020806/020806.pdf (2014.3.7 参照)

[13] 日本独文学会「機関誌刊行体制の改変について」
http://www.jgg.jp/modules/neues/index.php?page=article&storyid=384 (2014.3.7 参照)

[14] 日本独文学会「機関誌刊行体制の改変について」

ミナールの成果を踏まえた論文なども掲載していた。機関誌全体の紙数が大幅に減ることにともない、国際会議はその役割を終え廃止され、ゼミナールに関わる論文は別途記録論文集として編まれることになった。こちらも機関誌と同様の査読態勢を組み、機関誌と同じく Iudicium 社から出版されている。

3.2.2. 機関誌の電子アーカイブ化

日本独文学会の機関誌『ドイツ文学』“Neue Beiträge zur Germanistik” は全号が電子アーカイブ化されている。創刊号(1947 年)から 96 号(1996 年)までは科学技術振興機構 (JST) の総合電子ジャーナルプラットフォーム(J-STAGE) 上に論文と書評が無料で公開されている。[15] 97 号(1996 年)以降は国立情報学研究所の「CiNii 本文収録刊行物ディレクトリ」に収録されている。[16]こちらは独文学会会員以外であると有料になる公開であるが、定額料金で情報学研究所と契約している機関に属していると利用者個人は無料なので、多くの研究者は個人負担なしで利用できよう。海外からでもカード決済で料金を払って利用できるので、国際的にも開かれた形で使うことができるようになっている。

機関誌の電子アーカイブ化は必ずしも国際発信を目指して行われたものではないが、結果としてその機能を担っているといえるだろう。ただ、上述のように、97 号以降のものは有料であり、潜在的な読者を逃している可能性は大いにある。日本学術会議科学者委員会学術誌問題検討分科会の提言「学術誌問題の解決に向けて」(2010 年 8 月 2 日)[17] やそれに続く科学技術・学術審議会　学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会の報告「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」(2012 年 7 月)[18]を受けて、2013 年度から日本学術振興会の研究成果公開促進費のうち「学術定期刊行物」が新規募集を停止し、それに代って「国際情報発信強化」が新たに設けられた。その趣旨は、学術団体の国際交流を促進する点にあり、とりわけ査読・編集体制の国際化対応、電子化やオープンアクセス化（利用者が無料で利用できること）に焦点が当てられている。[19] もちろん、補助金を得ることが自己目的化してしまっては本末転倒であるのでそれにどのように関わるかは慎重に検討しなければならない。ただ、全面的に電子化し紙媒体を放棄するという選択はしばらくの間考慮の外であろうが、研究成果の国際発信という点でオープンアクセスへと向かうことが今後重要性を増してくるものと思われる。

---

15 『ドイツ文学』のバックナンバーは https://www.jstage.jst.go.jp/browse/dokubun1947/-char/ja/ で閲覧できる。

16 刊行後 2 年間は非公開、2 年を過ぎたところで利用可能となる。

17 http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t101-1.pdf (2014.3.7 参照)

18 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1323857.htm (2014.3.7 参照)

19 日本学術振興会「平成 25 年度科学研究費助成事業公募要領　科学研究費補助金（研究成果公開促進費）」(2012 年 9 月 1 日）
http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/13_seika/data/keikaku_dl/koubo/h25/fullpage.pdf
(2014.3.7 参照)

3.3.　ゼミナール

日本独文学会は現在「文化ゼミナール」、「語学ゼミナール」、「教授法ゼミナール」の 3 つのゼミナールを毎年開催している。これらは合宿形式の研究集会で、総合テーマをもち、ドイツの大学教授を 1 人ゲストとして招聘し、セミナーの主任講師としての役割を担う。[20] ゼミナールは総合テーマについての招待講師の講演と、参加者の研究発表、およびそれらについての討論からなる。定員は文化ゼミナールが 45 名、他が 40 名程度で、日本独文学会の会員であれば申し込みをして参加する資格がある。ゼミナールの歴史は 1959 年に遡る。文化ゼミナールがその年はじまったのである。ネイティブ会員のイニシアチブとドイツ大使館やゲーテ・インスティトゥート(Goethe-Institut)などの援助もあり [21]、ゼミナールは順調に発展した。文化ゼミナールはすでに 55 回を数える。1972 年には語学ゼミナールが、1992 年には 3 番目のゼミナールとして教授法ゼミナールが発足し、今ではこの 3 ゼミナールが学会の主要な事業の一つになっている。

ここでは第一線の研究成果が報告され活発な討論が行われる。とくに大学院生や若い研究者にとっては日本にいてはなかなか得られないドイツ語で討論をしたり研究上の情報を交換する貴重な機会となっている。ゼミナールをきっかけにドイツの研究者とコンタクトをとり、留学につなげていったり、研究上のネットワークを広げていったりと、これからの世代が国際的な場で活躍する機会を得るにも一役買っている。

近年になってゼミナールに東アジアから研究者を各ゼミに 1 名ずつ招待し、研究発表を伴う参加を依頼している。1990 年に文化ゼミナールに東アジアのゲストを招待するプログラムがはじまり、それが他のゼミにも拡大されたのである。2013 年度は語学ゼミナールに中国から、教授法ゼミナールに韓国から、文化ゼミナールに台湾からのゲストを招待し、東アジア地区のゲルマニスティクの交流を図っている。また、ゼミナールの成果は先にもふれたように論集としてまとめ、世界に向けて発信している。語学ゼミは毎年、文化ゼミ、教授法ゼミは隔年で前述の Iudicium 社から論集を出している。

この事業も財政的には補助金を得て成り立っており、現在ではドイツ学術交流会(Deutscher Akademischer Austauschdienst, 略称 DAAD)とのいわば共同事業として行われている。DAAD は学術の国際交流を目的にドイツの大学が共同で設置している機関で、とくに学生および研究者の交流を通してそれを実現するものである。財政的にはドイツ連邦共和国の政府機関（特に外務省）、ヨーロッパ共同体（EU）民間あるいは外国政府からの資金によって賄われており、世界最大の学術振興機関である。[22] ドイツでの研修、研究のための

---

[20] 招待講師はそれに加えて、日本の何箇所かで学術講演を行うことになっている。

[21] Wuthenow, Ralph-Rainer: “Sechzig Jahre japanische Germanistik aus deutscher Sicht“ 日本独文学会編『日本独文学会の 60 年』(2009) 3 頁, 神品芳夫「学会の 60 年を振り返る」日本独文学会編『日本独文学会の 60 年』(2009) 18 頁.

[22] DAAD のウェブサイトによる:
https://www.daad.de/portrait/wer-wir-sind/kurzportrait/08940.en.html (2014.3.7 参照) .

さまざまな奨学金を提供しているだけでなく、外国におけるドイツ語、ドイツ文化研究に関連するさまざまな活動への補助も行っている。日本独文学会に対しては主に 3 ゼミナールの運営と機関誌の刊行への補助を行っている。ゼミナールに関しては、DAAD の短期講師派遣事業という枠組みの中で招待講師を派遣するほかに、ゼミナール運営費の一部も負担している。また若手参加者の宿泊補助や、上述のアジアゲストの招待についても補助を行っている。[23]

3.4. ウェブサイト

日本独文学会は 1996 年からウェブサイトを構築し、情報発信を行っている。現在の URL は http://www.jgg.jp/ である。2006 年にリニューアルし、それ以来現在のような姿になっている。このときの重要な変更点は外見もさることながら[24]、日独 2 言語でサイトを構成していることである。すべての記事のタイトルは原則として日本語ページでは日本語で、ドイツ語ページはドイツ語で表示される。記事そのものも多くは両言語で作成されている。ウェブサイトという媒体の性格上、学会からのお知らせや催し物の案内が多く、国際交流・国際発信という点では直接的な貢献をなしているとは言い難いが、ドイツ語が読めれば誰でも日本の学会がどのような活動をしているのかを知ることができる。たとえば前述のゼミナールのお知らせはドイツ語によるテーマの詳細な記述とともに読むことができる。

3.5. 東アジア地域での交流

3.5.1. 海外学会との交流

日本独文学会は東アジア地区（中国、韓国、台湾）の学会との交流を定期的に行っている。ゼミナールにアジアからのゲストを招待していることは 3.3 で述べた通りであるが、これは日本独文学会が交流先の学会[25]にゲストの派遣を依頼しているものである。

アジアの学会からの招待もある。韓国の学会からは「ソラク・シンポジウム」という日本でのゼミナールに相当する研究集会に参加者を 1 名推薦するよう毎年日本独文学会に依頼がある。また不定期であるが、韓国の学会が国際シンポジウムを催す際には同じように参加者派遣の依頼がある。台湾の学会からも年次大会へ 1 人派遣するよう定期的に依頼が来る。これらはいずれも研究発表をともなう派遣依頼であり、数は少ないものの学問的な交流の実をあげている。

なお DAAD 東京事務所は独自のウェブサイトをもち、日本語ページも用意している：
http://tokyo.daad.de/wp/lang/ja/

[23] 教授法ゼミナールのアジアゲスト招待に関わる補助はゲーテ・インスティトゥートが行っている。

[24] それまでの html 形式のものから xoops というコンテンツ管理システムを用いたサイトに移行した。

[25] それぞれの名称は「中国高等教育学会外語教学研究分会徳語委員会」、「韓国独語独文学会」、「台湾徳語文学者暨教師協会」である。（常用漢字表にある漢字の字体はそれに従って表記した）

3.5.2.　アジア・ゲルマニスト会議

日中韓の 3 学会は 3 年に一度持ち回りでアジア・ゲルマニスト会議 (Asiatische Germanistentagung) という国際会議を開いている。これは東アジア地域でのゲルマニスティクの交流を通じて 1 で述べた Auslandsgermanistik の機能を深めようとするものである。[26] 参加者は 3 学会の会員が中心であるが、台湾のゲルマニストも多く参加している。また、ドイツ語圏からのゲルマニスト、さらには他のアジア地域やオセアニアなどからの参加もある。そして会議の成果は論文集として出版される。多くの参加者が寄稿するのでどれも大部な論集となっている。

アジア・ゲルマニスト会議の成立には 1 で述べた IVG 東京大会が大きな契機となっている。それまで東アジアでのゲルマニストの相互交流はほとんどなかったが、IVG の大会には全世界から、とりわけ韓国と中国からも多くの参加者が予想され、それをにらんで交流の機運が生まれたのである。[27] まずは、日本と韓国、中国との個別の交流が行われた。1989 年ソウルで日韓ゲルマニスト共同シンポジウムが行われ、[28] 翌年 3 月には北京で「日中ゲルマニスト共同シンポジウム」が開催された。[29] 同年 8 月に前述の IVG 東京大会があり、アジア地域からも多数の研究者が参加した。はじめて日中韓の三者が一堂に会したのは 1991 年のベルリンの日独センターで行われた日中韓ゲルマニスト共同シンポジウムであり、これが実質的な第 1 回アジア・ゲルマニスト会議である。[30] 1994 年には北京で国際ドイツ語教師連盟（Internationaler Deutschlehrerverband, 略称 IDV）アジア地区大会の枠組みで開催された。[31] 1997 年のソウル [32]から「アジア・ゲルマニスト会議」という名称が使わ

---

[26] 2008 年アジア・ゲルマニスト会議金沢大会のウェブサイトに掲載されたアジア・ゲルマニスト会議の歴史:
http://agt2008.jp/site/?page=Generalthema.ZielUndGeschichteDerAGT (2014.3.7 参照)

[27] 木村直司「日中韓によるアジア･ゲルマニスト大会の過去と未来」(2013.12.11):
http://avh-jp.com/?post_type=notes (2014.3.7 参照)

[28] これについての報告が機関誌に掲載されている：川島淳夫「日韓ゲルマニスト共同シンポジウム(韓日独語独文学学術大会)について」日本独文学会編『ドイツ文学』83 号(1989): 155-157.

[29] 機関誌に報告が掲載されている：有泉泰男/中沢英雄「日中ゲルマニスト共同シンポジウム」日本独文学会編『ドイツ文学』85 号(1990): 191-194. なお、中沢英雄がそれに加筆した文章をウェブサイトで公開している：
http://deutsch.c.u-tokyo.ac.jp/~nakazawa/others/1990j-c.htm　(2014.3.7 参照)

[30] 機関誌に報告が掲載されている：新田春夫「日中韓ゲルマニスト共同シンポジウム」日本独文学会編『ドイツ文学』88 号(1992): 175-177. また他に：中澤英雄「ベルリンにおける日中韓ゲルマニスト共同シンポジウム」DAAD 友の会会報『ECHO』7 号: 31-34、再録:
http://deutsch.c.u-tokyo.ac.jp/~nakazawa/others/1991jck.htm (2014.3.7 参照)

[31] 機関誌に報告が掲載されている：井上修一「IDV アジア地区大会参加報告」日本独文学会編『ドイツ文学』94 号(1995): 175-177.

[32] 機関誌に報告が掲載されている：保坂一夫「ソウルにおけるアジア・ゲルマニスト会議」日本独文学会編『ドイツ文学』100 号(1998): 197-199.

れるようになり、1999 年の福岡 [33]、2002 年北京 [34]、2006 年ソウル、2008 年金沢、2012 年北京と、多少のずれはあるが、ほぼ 3 年に 1 回のペースで続いている。[35] 国際会議の開催はその準備、運営に多大な労力を費やすだけでなく、財政的にも大きな負担となる。アジア・ゲルマニスト会議も DAAD、ゲーテ・インスティトゥートなどの振興機関や開催国政府の援助によってはじめて可能になっている。

91 年のベルリン以降（94 年北京を除く）会議には総合テーマが設定されている。以下列挙すると：

1991 年（ベルリン）	「東アジアの視点から見るドイツ文学・ドイツ語」
1997 年（ソウル）	「マルチメディア時代のゲルマニスティク」
1999 年（福岡）	「敷居を越える」
2002 年（北京）	「新たな世紀、新たな挑戦」
2006 年（ソウル）	「アジアにおける文化学的ゲルマニスティク」
2008 年（金沢）	「トランスカルチュラリティ―」
2012 年（北京）	「間言語性、間文化性、学際性：ゲルマニスティクの境界拡大」

であり、これらは前述の Auslandsgermanistik を強く意識したものとなっている。

4. 個人のイニシアチブ

以上日本独文学会が組織として行っている国際交流・国際発信について述べてきた。もちろん多くの研究者が個人として研究成果を国際的な場で発表する、外国の研究者と交流するという努力を続けていることは言うまでもない。ここではとくに個人のイニシアチブであるが、一定の組織化をともなっている活動を 2 つ紹介することとしたい。

4.1. インターウニ・ゼミナール

インターウニ・ゼミナール (Interuni-Seminar) は有志のドイツ語教員によって組織される非営利団体「インターウニ・ゼミナール実行委員会」が主催するもので、日本の大学や大学院でドイツ語を学んでいる学生のための合宿形式のゼミナールである。Interuni の uni は大学のことで、そこには個々の大学の枠を超えて、ゲルマニスティクに限らずさまざまな専攻の学生が集まる。このゼミナールは 1978 年にはじまり、主催者の世代交代も経ながら、毎年夏と春の 2 回開催されている。夏のゼミナールが本来のインターウニ・ゼミナールで

---

[33] 機関誌に報告が掲載されている：池田紘一「アジア地区ゲルマニスト会議を終えて」日本独文学会編『ドイツ文学』104 号(2000): 191-193.

[34] 機関誌に報告が掲載されている：渡辺 学「北京での第 4 回アジアゲルマニスト会議に参加して」日本独文学会編 Neue Beiträge zur Germanistik. Bd.1, H.2 (『ドイツ文学』110 号)(2003): 297-299.

[35] 次回は 2016 年に韓国で開かれることが決定している。

あり、ネイティブスピーカー、非ネイティブスピーカーの教員、学生、院生がテーマに即してドイツ語で討論する。春のゼミナールはドイツ語初心者ないし中級者向けで、ドイツ語でのプレゼンテーションやディスカッションのスキルを養成する目的で開かれている。なお、この活動もドイツの振興機関であるゲーテ･インスティトゥートおよび DAAD から補助を得て行っている。

ゼミナール自体は日本人ドイツ語学習者を対象としたものであるが、その目的はドイツ語で内容のあるプレゼンテーションやディスカッションを行う能力を開発することにあり、それによって、次の世代の日本人が国際的な交流・発信をより活発に行うための下地作りという効果が期待される評価することができよう。また、このゼミナールは 2006 年以降韓国からゲストを招いて国際交流の実践も行っている。[36]

なお、西日本でもゲーテ･インスティトゥート大阪と日本独文学会西日本支部の共催による「インターウニ西日本」が 1989 年以来行われている。[37]

4.2. 日独言語学の提携

ドイツ語圏をはじめとする外国の研究者との共同研究ないし共同プロジェクトを試みている研究者も少なくないと推察できるが、ここでは筆者が知る言語学関係のプロジェクトに触れたいと思う。いずれも若手研究者の育成を視野に入れた試みであり、将来的に日本のゲルマニスティクの発信力の強化に結びつくことが期待されている。

2011 年にミュンヘン大学で日本語とドイツ語の対照言語学サマーコースが開かれた。これはミュンヘン大学と日本のドイツ言語学者との共同企画によるものであった。サマーコースに引き続いてワークショップも行われ共同研究へと発展する可能性が追求された。[38] また、日本学術振興会とドイツのドイツ学術振興機関である Deutsche Forschungsgemeinschaft (略称 DFG) の二国間交流事業に採択された日独語対照研究についてのセミナーが同年 12 月にハンブルク大学で行われた。ここでも研究者同士の交流が行われると同時に、後継世代の育成を視野に入れた活動が行われている。[39]

5. おわりに

以上日本のドイツ語学・ドイツ文学が現在行っている国際交流・国際発信に関わる活動を紹介した。これらの活動が研究者の主体的な取り組みに発していることはいうまでもな

---

[36] 以上、インターウニ･ゼミナールのウェブサイトの記述を参照した: http://www.interuni.jp (2014.3.7 参照)

[37] インターウニ西日本のサイトは: http://interuni.doitsu-go.net

[38] 日本独文学会ウェブサイトのコラム欄に報告記事が掲載されている：田中愼「ミュンヘンの夏 2011：ミュンヘン大学・言語学サマーコースおよびワークショップの報告」 http://www.jgg.jp/modules/kolumne/details.php?bid=76 (2014.3.7 参照)

[39] 学術振興会に提出された報告書がウェブ上で閲覧できる： https://www.jsps.go.jp/j-bilat/semin/data/h23_semin_houkoku/europe/40_11JSDFG_Ogawa.pdf (2014.3.7 参照)

いことだが、本文でも触れたとおり財政的な面でさまざまな振興機関の補助に支えられていることを再確認したい。援助を受けるに値する成果をこれからも挙げ続け、それを効果的・組織的に発信してゆくことが求められることは自明であろう。

今日本において英語以外の外国語・外国文学の教育研究を取り巻く環境は必ずしも良好とはいえない。若い研究者たちは優れた研究を行っているが、それが生活の糧に結びつくチャンスとなると総じて厳しい状況にある。外国文化の研究がもつ 1 つの大きな意味は、異なるものの光で自らを照らし出し、自己理解を相対化し、深めることにある。ここでは触れることができなかったが、日本におけるゲルマニスティクの将来の発展のために、われわれはそのような対内的な機能についても意識的であるべきであろう。